

ささやきボイスシリーズ

タイトル：しっかり先輩とおうちで耳かき

シチュエーション： しっかり者の先輩・部長

キャラ設定

泉あやか（17）

高校2年生

ライトノベル同好会・代表

学級委員長

◎外見

身長：152センチ

体重：上記身長で標準体重。

バスト：Dカップ

ウェーブが掛かったセミロング髪で可愛いより美人に近い容姿をしている。

性格はしっかりものである。

大人びた見た目なのにどこか幼い雰囲気が残る。

◎家族構成

父、母、あやか、妹（10）

父親は会社員。

母親は専業主婦。

妹は小学5年生、バスケットが得意。

◎性格・人物

ごく普通の会社員の父に専業主婦の母を持ち、普通に育った女の子。

性格は温厚で誰にでも優しく、思考はしっかりもので、行動はドジっ子。

国語が好きで読書好き。

母親が美人の部類に入るため、自身もその容姿を引き継いで小学校の頃からラブレターをたくさん貰うほどには人気があった。

7歳下の妹がいるため中学くらいから少し大人びた雰囲気と行動を取るようになる。

中学3年では学級委員長に選出され以降、クラスの重役というポジションに酔いしれる。

高校に入ってライトノベル同好会を立ち上げるが、クラスメイトと後輩の主人公の3名のみ。

◎特技・エピソード

中学の頃に従兄から貸して貰ったライトノベルをきっかけにライトノベル作家になるのを

夢見て執筆活動を開始。

もともと国語が好きで小説も読んでいたため、すぐに作品を作り上げる。

作品はWebに小説をアップしてみたところそこそこ話題になった。

今では同人で挿絵付きの小説販売もしており、こちらもそこそこ売れている。

シナリオライターとして他のサークルから声が掛かるも、こちらはちょっと及び腰。

漢字検定2級。

県高等学校俳句コンクール二年連続の金賞。

県高等学校作文コンクール二年連続の最優秀賞。

全国高等学校俳句コンクール一年：審査員特別賞、二年：審査中。

将来の芥川賞、直木賞作家候補として才能があるのではと教員らは期待を持っている。

◎将来の夢

ライトノベル作家。

シナリオライター

ライター

上記含めた物書きを目指す。

◎主人公への思い

4月に入って来てくれた主人公にライトノベル同好会をライトノベル部に昇格させるべく期待を寄せる。特別恋心とかは持ってなかったが、主人公の書く小説の世界観に惹かれる。あやかのクラスメイト、大杉翔子が休みの時に主人公から告白を受けて恋人同士になる。

ープロットー

<CHAPTER1:休日の同好会>

文化祭が迫ったある日、作品を仕上げるべく休日に学校で執筆活動をするあやかと主人公。祥子も来る予定も余計な気を回されて二人きりの活動になる。

主人公が今回作っている作品が最近同人界で流行の音声作品の台本と聞いて、読んでみると耳吹きかけや、耳かきというものがあり試してみようかとなる。

<CHAPTER2:お家で耳かき>

あやかは主人公と二人であやかの自宅に来る。

家族は出かけていて誰もおらず、音声作品での基本的に耳かき、耳吹きかけ、最後に耳元で囁かれながら寝るという一連の流れを主人公に行う。

—台本—

<チャプター1:休日の同好会（モノラルマイク）>

SE：教室のドアを開ける。

【正面少し距離があるように】

「おはよう！って、君だけ？翔子は来てないの？」

【正面近づいてくる】

「え？急なバイトで来れなくなったあ？」

【↓は小声で】

（もしかして、変な気を回したの？ あ、ううん、違う。きっと面白がってるわね）

【正面：机を挟んで向き合う距離感】

「全く、翔子は一」

SE：カバンを置く音。

「そう言えば文化祭に出す作品なんだけど、どう？」

「うん、うん。もう推敲の段階っと。君のペースなら作品はしっかり間に合うわね」

「問題は翔子よ……。あの子、ちゃんと作品完成させられるのかしら」

「え？わたし？ふふん！わたしも既に推敲の段階よ！」

「程よく読める原稿用紙換算で約百枚の中編ね！ネット小説で書いていた作品の設定をベースに現代風アレンジを入れてのライトな学園推理もの！」

「推理あり！恋愛あり！アクションはちょっとだけどアクションもあり！」

「挿絵は漫画研究部から応援を頼んで、男女に受けそうなイラストも準備中！」

「って、設定段階から一緒なんだから知ってるわよね？」

「え？誰かにわざわざ説明しているような感じだったって？き、気のせいよ。気・の・せ・い！」

「君は確か、最近同人音声で流行ってる、耳かき音声の台本だったっけ？」

「聴かせてもらったけど、今は音声作品の世界も奥深いわよね。あの耳かきの音だって、まるで本当に耳を搔かれているような音だったし、耳に行き吹きかけるのも正直背中がぞくぞくとしたもの……」

「わたしも君に聞かせてもらってからちょっと買っちゃったわ」

「ところで台本書いて見せるだけなの？」

「ちゃんと音声作品にはするんだ？誰か宛でもあるの？」

「え？わ、わたし！？わたしにやれって言うの？む、無理よ！無理に決まってるじゃない！」

「書いた台本の女の子はわたしがモデルって……。あ、いや、わたしがモデルなのはいいけど演じるのは無理だからね！」

「音声作品携わってる声優さんをお願いした方がいいんじゃないの？」

「うん、そうしなさい。わたしにやらせてもせつかくの台本が台無しになっちゃうわ」

「それに……。こんな台本なんて無くたってやって欲しいならやってあげるわよ」

「や、やって欲しいんでしょ？台本に書いてある内容……」

「今日はもう翔子も来ないでしょうし。今から、わたしの家に行ってやって上げてもいいのよ？どう？」

「うん。そう来ないとね！」

<チャプター2：お家で耳かき（バイノーラルマイク）>

SE：扉を開ける音

【右正面】

「はい、入って。そう言えば君と付き合うようになってからうちに来るのもわたしの部屋に入るのも初めてだったかしら？」

【右側から正面へ】

「ふふふ、そんなに緊張しなくてもいいのに。それに今日は誰もいないから大丈夫よ」

「ちょっと、待ってね……」

SE：ベッドに座る音

【左少し距離有】

「はい。じゃあ、あなたはわたしの隣に座って、膝の上に頭を置いてね？」

「なあに？もしかして、この期に及んで恥ずかしがってるの？」

「大丈夫だから。ほら、わたしの隣に座って」

【右側】

「そうそう。よろしい。そのままわたしの膝を枕にするようにして」

「ん。それでいいわ」

「さて、耳の中はどうかしらー？」

「結構綺麗ね？自分で耳かきしてるの？」

「そうなの。じゃあ、マッサージ気分で耳を搔く感じにする？」

「じゃあ、適当に耳を搔くわねー」

【ここから1分間程、耳を搔いているような息遣いを。あとで使いまわします】

SE：耳かき音

「どうかな？気持ちいいかしら？」

「そう、良かったわ。それじゃ続けるわね」

【息遣いを組み合わせてループ】

SE：耳かき音継続

「そろそろ、反対側をやるわね？頭を反対側にして」

【左側】

「どうかしたの？スカートの裾が目前にあって落ち着かない？な、中、覗いちゃダメだからね！じ、事故なら仕方ないけど故意に覗いたら起こるから！」

「え？今からでも下を履き替えたらって……。そこまではしないわ。わたしが悪かったは、君は覗くなんて卑怯なことしないわよね？それじゃ、続けるわよ？」

「こっちも見事に綺麗な耳ね～」

【ここから1分間程、耳を搔いているような息遣いを。あとで使いまわします】

SE：耳かき音

「どうかしたの？眠くなってきちゃった？ふふふ、君にリラックスしてもらえてるのね。いわよ。眠くなったら寝ちゃっても」

【息遣いを組み合わせてループ】

SE：耳かき音継続

「はい。終わりよ。気持ちよさそうにうたた寝してたのね」

【ここから無言ささやき・右。この先、指示あるまで無言ささやきを継続で】

「じゃあ、ここからは次は耳元で息を吹きかけてあげる」

「まずは右耳からね？」

【ここから1分ほど右耳に息を吹きかける音声をお願いします】

「気持ちいい？というか。君、顔がとろけてるわよ。ふふふ」

【ここからは無言ささやき・左】

「それじゃ、次は反対側ね？」

【ここから1分ほど左耳に息を吹きかける音声をお願いします】

「良かったかしら？」

「ふふふ。そう。良かった」

「君はこういうのどこで知ったの？」

「SNSのフォロワーさんから聞いたんだ？そう言えば、君もネット上で小説公開していたものね」

「君の書く小説、わたし結構好きよ。内容はありきたりかも知れないけど、主人公の熱い思いと、その熱い思いと反対に持っている冷静さ。あれ、誰をモデルに書いてるの？」

「え？君自身なの？ふふふ、そうなんだ。あ、でも言われてみればそんなところも君にはあるのかな？」

「でも、そんな君がわたしは好きよ」

【ここから無言ささやきで左側に「好き」約30秒ほどお願いします】

【ここから無言ささやきで「好き」を10秒ほど言いながら左側から右側に移動】

【ここから無言ささやきで右側に「好き」約30秒ほどお願いします】

「ふうー、自分でやっておいて恥ずかしいわ」

「君も顔真っ赤ね？ふふふ、どう？好きな彼女から好きをこんなにたくさん言って貰えて？」

「幸せ？ホント？嬉しい。わたしもやった甲斐があるわ」

「翔子の気遣いもたまにはいいわね」